

4. 外国人特別研究員との共同研究の概要

本研究課題では、研究申請時に立てた次の二つの仮説を検討しながら研究を進めた。

仮説1. 琉球諸語と九州方言が親密な系統関係にあり、九州琉球祖語を設定し、九州方言が持つ他の本土方言との共通性は、琉球諸語が九州琉球祖語から分岐したのち、九州方言が他の本土方言の影響を受けて現在に至った。

仮説2. 九州方言と琉球諸語の類似性は、日琉祖語から琉球諸語が分岐したのち、九州方言からの長期にわたる絶え間ない影響を受けた結果である。

比較・歴史方言学的な研究の中心を宮古語に置いて研究を開始した。宮古語は、八重山語と共に日本本土から最も遠い南端に位置し、日琉祖語に遡る形式を保持すること、日琉祖語分岐後の日本語との言語接触による影響が少ないと想定されることがその理由であるが、外国人特別研究員 JAROSZ Aleksandra Natalia (以下、Aleksandra) さんが大正年間に沖縄県宮古島を3度訪問したロシア人言語学者ニコライ・ネフスキーの残した『宮古方言ノート』（現代邦訳「宮古諸島の語彙研究のための資料集」）の活字化とデータベース化を行い、その成果に基づいた研究成果を有することも理由の一つである。

Aleksandra さんには、琉球大学大学院博士後期課程（人文社会科学研究科比較地域文化専攻）で毎週1回開講される大学院ゼミ（琉球語ゼミ）に出席してもらい、研究の進捗状況、臨地調査の結果報告、論文草稿の検討などを行なってもらった。そこで狩俣は琉球語研究に長年携わってきた立場から指導、助言、意見交換を行なって研究を進めた。狩俣が代表を務める研究組織沖縄言語研究センターの月例の研究会、および狩俣が研究代表者を務める「琉球大学学長PIプロジェクト「琉球諸語における『動的』言語系統樹システムの構築をめざして」」の研究会、シンポジウムに参加してもらってそこで研究成果の発表および意見交換も行った。

研究の進展に伴い、比較の対象言語を八重山語にも広げた。歴史的に薩摩藩・鹿児島との密接な関係があり、地理的にも九州と近接している奄美語、国頭語、沖縄語の北琉球諸語よりも言語接触による影響も少なくない宮古語と八重山語に広げることで比較研究を確実にすると判断したことによる。宮古語、八重山語の南琉球語を九州方言と比較研究することで言語接触による類似の可能性を一定程度排除できると考えた結果である。（狩俣2018, 2019など参照）。

比較に際して、辞典類などの既存の資料から南琉球諸語と九州方言の類似性を探す方法と、現地調査を行う方法とを併用し、南琉球語の下位言語の宮古語、八重山語、与那国語の歴史を解明することを試みた。

九州方言は共時的に明らかに日本語の下位方言であり、琉球語と大きく異なる特徴を持つが、九州が日本本土の中で地理的に琉球に最も近く、九州方言が琉球語と密接な系統的な関係をもつことが示唆され、10世紀ごろの琉球祖語の担い手であった言語集団の琉球列島への出発点も九州であったことも論じられている（Serafim2003、Pellard2015、狩俣2018、2019など）。南琉球語を含む琉球語と九州方言で共通に見られる要素の中には日琉祖語までに遡る

要素、すなわち九州以北の本土方言にも存在する要素もあるので、それを排除するよう確認しながら研究を進めた。

5. 外国人特別研究員との共同研究の成果とその評価

Aleksandraさんは、欧州で比較研究に使用される基礎語彙一覧 Leipzig-Jakarta List (Tadmor & Haspelmath 2009) を使用して九州琉球祖語に遡る可能性のある語彙を「身体」「感覚・感情」「自然現象」の分野で南琉球語と九州方言に見出した。九州でも鹿児島県および宮崎県諸県地方である。この結果は仮説1の一部を支持するもので、Serafim2003、Pellard2015、狩俣2018、2019とも一致する。ただし、九州方言と一括りにできず、南九州方言と琉球語の関係を九州方言全体にあてはめられるものではなく、九州方言と琉球語の比較研究の大きな課題である。なお、Leipzig-Jakarta Listを使った琉球語の研究はこれまで見られなかったもので、その手法は他の琉球語の研究に活かされることが期待される。

宮古語来間島方言が受身・可能接尾辞に二つの形式があること、その一つが上代日本語(万葉語)に存在した形式の可能性が高いことを見出した。日琉祖語に遡り南琉球語以外で消失した古い形式を宮古語が保持しているものである。この形式は琉球語に関する先行研究で指摘されなかったもので、日琉祖語の研究に宮古語研究の役割が重要であることを示す発見である。類似の形式が八重山語波照間島方言でも確認できたが、分析の対象を来間島方言、波照間島方言以外の宮古語および八重山語に広げて検証していくことが課題である。

研究成果の一部は Aleksandraさんの単著として「宮古語来間方言における強変化動詞の終止的形式」(『国際琉球沖縄論集』8号、2019)、「『宮古方言ノート』における医療語彙」(『琉球の方言』43号、2019)が公開されている。現在投稿中の論文もある。学会での口頭発表も「宮古語来間方言における日琉祖語の痕跡」日本言語学会第158大会2019.6.22.、国際学会 International Conference on Historical Linguistics (ICHL) 24 “Common Kyushu-Ryukyuan substratum in Kyushu dialects: insights from the Leipzig-Jakarta list” キャンベラ2019.7.2.の2件を行った。研究成果は今後も Aleksandraさんの単著として投稿する計画である。帰国後は日本滞在中に収集した文献資料を活用した研究を継続し欧州で開催される学会での口頭発表、投稿等を行う。なお、収集した文献資料の中には欧州では入手が困難な自費出版や絶版になった書籍のコピーなどが多く含まれており、帰国後の研究を確かなものにするうえで有益であった。

文献調査の過程で天理大学附属図書館のネフスキー文庫、大阪大学の石浜文庫でこれまで知られていなかったネフスキーの資料を見つけて複写した。活字化し訳・解説を付けて発表するための許可も得た。順次公開する計画である。

琉球語の共時的な研究が主流をなすなかで歴史言語学的な研究を進めたこと、九州方言と琉球語の比較歴史方言学的研究の足掛かりを作ったこと、日琉祖語研究における宮古語研究の重要性を再確認したことは大いに評価できるものである。